

昭和22年カスリン台風大水害の思い出

島村 繁夫

明治43年の洪水の父の経験が被害を軽減

昭和22年9月16日午前0時45分、当時の北埼玉郡東村と原道村の境400メートルに渡り利根川の堤防が決壊、そのため当時の百間村字百間であった、私の住所である、東武動物公園駅東口駅前帯は、約1メートルの深さの水に覆われてしまった。

当時の私の家は、現在より低く建っており道路面と家の土間の高さが同じ位だったが、床上（畳が敷いてある高さ）約30センチまで水が来て、大変な騒ぎで、約1週間位（？）水の中の生活を送った。

中敷（押入れの中段の高さ）の所へ反対側に台を置いて、それにネダ（畳の下に敷いてある細長い板）を乗せて、その上に畳を何枚か敷いて、その上に布団を敷いて寝た。手を伸ばすと天井と触れる高さで、子供心（当時17才）にも変化のある寝方で興味ある生活だった。

水が引いた後の片付けが大変だったが、詳しい事は記憶してない。準備が早かったせいか一斗樽一個流しただけの損害ですみ、明治43年の利根川堤防決壊時の経験をしていた父親の意見及び準備のおかげだという事を、その時の父親の説明で分かった。家の押入れの半分下の板戸に、その時の水の来た後が染み込んで、色が変わっていたので、利根川の堤防が切れると、ここまで水が来ると言う話は聞いていたので、中敷の上へ避難したというわけだった。

電柱に残る洪水の記録

駅の土間に水が入ったかどうか記憶はないが、ホームは港の埠頭のように水の上に出ているだけで、その間を水がとうとうと流れていて怖かった。落ちたら助からないと思いつながら、埠頭のような状態をしているホームの上を歩いた記憶が残っている。駅前広場は、当時は砂利敷きであったが、5～6歳位の子供たちが水浴び（水泳）をして遊んでいるのを何度か見ている。それ位駅前広場も水があったということである。百間2丁目と百間3丁目の境の角あたりは、1メートル位の深さだったと記憶している。

川島地区は水没せず、やはり川の中の島だなーと感じた。その外の水の深さは出歩けなかったもので、よく分かってない。危ないので、家の回りだけしか出歩かず、駅と古川橋あたりまでだった。古川橋は真ん中が水没せず表面を水の上に出していたが、河原橋は水没して見えなかった。

現在でも、杉戸町駅前通りの左側（駅から見て）の電柱には「22年大水の時はここまで水が来た」という赤線が書いてあるので、現在でも大体予想ができる。

駅前通りは、現在も「みなみかわ散策路」あたりまで水没、旧4号国道も水没した所があり、杉戸町役場発行の「杉戸町の災害」という本の付録に「杉戸町昭和22年カスリン台風水害調査・カスリン台風浸水深分布図」として、カラー印刷紙があり、それを見ると良く分かる。

水の到達時間は、私の記憶では翌17日0時頃、家の板の間に腰掛けを置いて座り、水のくるのを見ていたが、始めは下水が溢れ出して、それから徐々に水が増してきたのを見ていた。知らない大人の人が、水の中の往還を橋の方へ向かって歩いて通りながら、私を見て苦笑いしていたのを記憶している。

困ったことは、折角実ったサツマ芋が水に漬かってしまった為、ふかしても柔らかくならず、食べられない事だった。当時のサツマイモは、準主食扱いなので家族全員困ってしまったことである。

東京まで押し寄せた洪水

水が出て3～4日してからか、埼玉県と東京都の境(?)である「桜堤」まで水が行き、その堤防がいつ切れるか、と毎日のラジオを聞き(?)、新聞を注目して見ていた。切れるのを待っていたわけではないが、「桜堤がいつ切れるか」というのが、その時の話題の中心のようであった。切れた後は、水は一気に東京湾に流れだして、私の家の回りの水も引いていったように記憶している。それからの後片付けが大変であったが。

百間村内の悲劇

百間新道の中央の道路(杉戸蓮田線)の先端(現在の農協あたり)から先は通れず、山崎の青年団を中心とした人達が、舟で送り迎えをやっていたと、後で聞いた。浅間様の前で撮った写真が残っているが、満々とした水が写っていて、当時の様子がよくわかる。金原あたりの人か、兄弟で杉戸蓮田線の道路を歩いていて、帰宅を急いでいたが、水の勢いが強く途中で流され、弟さんは電柱につかまって翌朝助けられたが、兄さんの方は流されて行方不明となり、百間村でただ一人の犠牲者となってしまった。お気の毒なことであった。

当時の2～3日は電気もつかずラジオも聞けず、新聞も配達なしと、つんぼさじきで、古川橋の上、中央は水の上に出ているので、そこでの噂話が興味の的であり、ニュースの出所のようなものであった。電気の復旧と新聞の配達がいつごろかは、ハッキリ覚えていない。

山の木の伐採が大洪水の原因に

戦争のため山の木を切って、整備していなかったため、大雨の水が一気に山の表面を流れて、川へまともに大量の雨が流れ込んだために、大洪水になったと聞いている。敗戦前までは、利根川の土手が危ないときは、群馬県側の土手を人工的に切って、水が東京迄来ないようにしていた、そのために渡良瀬遊水地が有るのだと聞いていた。

以上思い出すままに当時の模様を書いてみたが、とにかく大変な経験をしたと、今でも思っている。

昭和22年の洪水の記憶

根岸 よし子

6才の時、洪水にあいました

防災計画検討委員会で洪水ハザードマップ作りの参考のためということで、昭和22年の洪水のことについて、書いて欲しいという話がありました。当時は小学低学年（6才）でしたので、おぼろげな記憶しかありませんが、いくつか記憶に残っているものを書いてみます。

鳴り響く半鐘と恐ろしい光景

その日は朝から何となく父母たちの動きがいつもと違うので、「何かあるの」と聞いてみたら「大水が来るのだよ」と、それを聞いて子供心にも恐ろしいことがあるのかなあと思いました。

畑の作物サツマイモなどを掘ったり家の周りなど片付けていました。夕方になると半鐘が鳴り出し「古川橋が決壊したぞ」という声が聞こえて来ました。父と母、兄（17才）の3人は柱と柱の間に丸太を縛りつけて棚を作り（農家の間取り田の字型）畳、布団、家財道具を乗せていました。

私は物置の二階に早くにいかされローソクの灯りで米俵やいろいろな物の中にうずまって、いつしか眠ってしまいました。また半鐘がだんだん大きくなり「杉戸の郡農会が火事だぁ」という人々の声が聞こえ、窓から見ると赤々と炎があがっており、下は大水で恐ろしい光景でした。でも父母たちは、まだ母屋の中で何かしているらしく二階には来ませんでした。

どろ水の海をさまざまな物が流れてきた

次の朝目を覚ますと外はどろ水の海でした。白い物が流れてきました。それは鶏。そのうちに大きな黒い物、それは牛でした。材木やいろいろな物が引っかかり流れていました。何日かして水が引けた後は、父母たちが井戸水で家の中や建具などを洗っていました。縁の下や家の中に白い粉（たぶんDDT）をまいていました。

古利根川は家の150メートル裏を流れていました。

カスリーン台風体験談

姫宮在住 萩原 一丸

私は、昭和5年1月3日に旧百間村に生まれ、百間小学校から杉戸農業高校卒業後、農業の手伝いをしていました。カスリーン台風による水害があった当時は17歳でした。

■カスリーン台風が過ぎ去って・・・

1947年9月15日、カスリーン台風が去った後、大水による水害が起きました。役場から発信された「大水が来る」という情報を、区長が一軒一軒伝え回ってくれ、私はそのことを知りました。16、17日、台風一過の晴れ間が広がっていましたが、私の記憶では、夜になって北の方向からゴウゴウと大きな音が聞こえ、それから大水がやってきました。18日になると、いよいよ水嵩が高くなってきて、姫宮落川と笠原落川の水が逆流するのを見ました。水害とは直接関係ありませんが、17日の夜には杉戸の郡役所が火災になったようで、大水による被害と相まって大変な苦勞をされたのではないのでしょうか。

■船での移動

我が家の庭まで水が来たころ、松ノ木島に住む木村さんが、農協からの帰りに股あたりまで水に浸かりながら、私の家に立ち寄られました。「船を出してくれ」とお願いされたので、柚の木まで船で送って行くことになりました。船は、当時物置の天井に設置されており、それを3人がかりで下ろしました。船は大層重く、馬鹿力を出したのを覚えています。高橋たかはし（現在の川端公民館）辺りからは、土地が高く歩けましたので、木村さんとはそこで別れ、私は船で家まで戻りました。

■不衛生な洪水の水と収穫への被害

家の中は、戸棚の中程まで水に浸かってしまいました。杉戸方面からどんと水が流れ、その中に木材や豚などを見ることができました。姫宮駅の手前の線路の上しもごえに下肥ための中身が流れ着いたくらいですから、洪水の水の状態はかなり不衛生なものだったと思います。また、稲刈り前の時期に大水が来たために、その年はあまり米が採れませんでした。

■避難と助け合い

八代村やしろ（現在杉戸町）では水が多くて屋根の上に避難した世帯もいたという話も聞きました。私の住んでいた辺りでは、当時も高台にあった姫宮神社に何世帯かが自主的に避難していました。私の家には、住居の裏に蔵がありましたので、そこへ避難したため、避難所に行った記憶はありません。飲み水は、姫宮神社の隣に住む野口さんが厚意で各戸に水を配ってくれましたので、大変助かりました。このように、ご近所（当時、姫宮30戸くらい）で助け合いながら、大水の被害の中、暮らしました。

■水害から学んだこと

この水害があつてからは、家族の中では、今度家を建て替えるときには、蔵があつたところくらいに土を高く盛って、その上に建てようということが話し合われ、それは建て替えの際に実現しました。

カスリーン台風の記憶

山崎 山本忠敬

千葉県小見川町の洪水被害

昭和22年9月のカスリーン台風は、私が6歳の時の出来事だった。私は、満州から母と引き揚げ、当時祖父の居る千葉県香取郡小見川町の大利根造船の社宅に住んでいた。

台風一過、穏やかな数日がたった頃、家の傍の川の水がじわじわと増水してきた。最近のテレビでみる荒々しい濁流でなく静かに少しずつ水が庭、庭石と水に没していく緩慢な増水だった。

平成9年に関宿城博物館でカスリーン台風回顧展が開かれていた。その回顧展で決壊場所が大利根町であり、遠く離れた東京の葛飾、足立、江東などが浸水したことを知った。千葉の小見川町は更に決壊地より離れており、しかも決壊地点より下流で分岐している江戸川のどこを越えてきたのか、などの記録は無かった。

押入れで寝起き

洪水はゆっくりであったので家財道具、布団、畳などを片付ける時間的余裕があった。造船所とはいえ、平底の木造川舟を作る小規模の会社で、事務所も社宅も平屋だった。木材や、鉄骨で出来たやぐらのようなところに板を差し渡し、その上に畳を置き、その上に家財道具を積み重ねていた。障子、フスマ、布団は部屋の鴨居に細材木を数本差し渡し、その上にのせていた。容赦なく水嵩が増してきて、床上を越えたが、最終的には子供の胸の高さ程度で止まった。社宅は床下が高く、そのため押入れは助かり、押入れで寝起きした。

我々子供たちは、窓から、俄かに出現した庭前面の池に嬉々として飛び込み遊んだ。ただし当時は汲み取り便所であるので汚物が漂っていた。それはあまり分散しないで適当にかたまっているのを避けて泳いだものだった。

電信柱とか木の幹が、全て緑色に変色していた。近づいてみるとそれは幾重にも重なったイナゴであった。手を出してもイナゴは逃げることをしない。みな疲れ果てているのであろうか。すぐ家に袋を取りに帰って返した。電信柱に袋を押し付け上から手で掻き落とすと数匹、飛び去って水に落ちるのがあったが、大部分は大人しく袋に収まった。

しばらくの期間、煮たイナゴが食卓に上がった。

汚水が引くまでが長くかかり、飲料水に困った。

この、生活がどの程度続いたのか記憶に無いが、増水に比べ、水が引くのは時間がかかり、最後は、田んぼにいつまでも水が残り、いたる所が湿地帯となった。

9月の中旬といえば、今ではほとんどが稲刈りは終わっているが、当時は、稲が大部分残っていた。その稲穂が水中で腐り、異臭が漂い始めた。稲穂がついたまま腐ると強烈な匂いになることをその時知った。特に穀物倉庫はその後何ヶ月も臭くて近づけなかった。

水が飲めないのも、喉が渇いたのを覚えている。救援隊が来たのかどうかは覚えていない。田舎の町外れであったので多分来なかったのではないかと思う。井戸しかない地域だ

ったので、どのように水の確保や、炊事をしたのか祖父母に聞いておけばよかったと悔やまれる。今の時代は、電気が止まれば水道も含め生活ラインはストップしてしまう。炊事は卓上コンロが普及しているから何とかなるが、問題は水である。

いまではソーラーシステムを導入している家も少なからずある。停電してもソーラータンクから水を取り出せるような配管にしておけば、タンク1台で近所数件分の水はとりあえずまかなえるのではないかと考える。なんと言っても水が最も貴重である。